

令和 2 年 6 月 1 日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17H02625

研究課題名(和文)被災コミュニティの内発的復興を支えるアクションリサーチ

研究課題名(英文) Action research for promoting endogenous recovery of community affected by huge disaster

研究代表者

永田 素彦 (Nagata, Motohiko)

京都大学・人間・環境学研究科・教授

研究者番号：60271706

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,800,000円

研究成果の概要(和文)：巨大災害にあったコミュニティの内発的復興を促す関係性の特徴を、アクションリサーチを通して明らかにした。研究フィールドは、東日本大震災の被災地である岩手県野田村と、熊本地震の被災地である熊本県西原村である。成果の概要は次の通り。(1)復興感の程度は、災害をきっかけとした「重要な他者」との出会いと強く関連している。(2)内発的復興を支える基盤として、外部支援者とのコンサマトリーな関わりが重要である。(3)内発的復興を促す工夫として、日常的な支援-受援関係を逆転するような介入が効果的である。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、主体性・内発性は個人の内的属性ではなく関係性の産物であるという観点から、被災者・被災コミュニティの主体性・内発性を支える関係性の特徴を示した点である。本研究の社会的意義は、コミュニティの内発的復興を促すにあたって、どのような関係性を志向するのが望ましいのか、その指針を示した点である。本研究の成果は、今後の災害における内発的復興に取り組む際に参考になるものと思われる。

研究成果の概要(英文)：We examined the characteristics of the relationship that promotes endogenous recovery of communities affected by catastrophic disaster through action research. The research fields are Noda Village, Iwate Prefecture, which is a disaster area of the Great East Japan Earthquake, and Nishihara Village, Kumamoto Prefecture, a disaster area of the Kumamoto Earthquake. The outline of the results is as follows. (1) The degree of the sense of recovery is strongly associated with encounters with "significant others" triggered by the disasters. (2) Consummatory relationship with outside supporters is important as the basis of endogenous recovery. (3) An intervention that reverses the relationship of 'support-giver and support-taker' in everyday life is effective to encourage endogenous recovery.

研究分野：社会心理学

キーワード：災害 内発的復興 アクションリサーチ

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

巨大災害後には、被災者の生活復興とともにコミュニティの復興が急務となる。本研究の研究代表者および研究分担者は、東日本大震災の被災地である岩手県野田村、および、熊本地震の被災地である熊本県西原村において、発災直後から被災コミュニティの救援・支援活動に深く関わってきた。その際重視してきたことは、内発的復興を支えるということである。復興支援活動は、しばしば逆説的に、「支援者 - 受援者」役割を強化して、被災者や被災コミュニティの主体性や内発性を疎外してしまう効果をもつ。被災者・被災コミュニティの内発的な復興をどのように支援していくかは重要な課題である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、被災コミュニティの内発的復興を支える関係性の特徴を、アクションリサーチを通して明らかにすることにある。内発的復興とは、住民が、地域の資源を活かしつつ、自分たちのやり方で主体的に復興することを指す。具体的には、上述の2つの被災地を研究フィールドとして、被災コミュニティの住民と外部研究者との協同的实践を通じて、内発的復興を支える住民 - 外部者関係、および、住民間関係の特徴を明らかにする。

3. 研究の方法

上述の目的を達成するために、以下の研究方法を用いた。被災者やコミュニティの復興感とその関連要因を明らかにするために質問紙調査を実施した。岩手県野田村において、震災後に設立されたNPOの活動への参与観察、および、関係者へのインタビューを行った。また、新興コミュニティである高台団地において、コミュニティ活動への介入的な参与観察を行った。熊本県西原村において、特に被害の大きかった集落を対象に、関係者へのインタビューおよび復興支援活動への参与観察を行った。住民と外部者(学生)によるコミュニティの将来像を考えるワークショップを実施した。

4. 研究成果

(1) 復興感と「重要な他者」

岩手県野田村において、復興感と関連する項目を明らかにするために質問紙調査を行った。その結果、復興感の程度、特に、震災以降の生活を震災前と比べて肯定的に感じられているかどうかには、震災前後での人付き合いの増減(特に、村外の知り合いとの付き合い、地域の仲間との付き合い)および、震災をきっかけとした重要な他者との出会いの有無(特に、心を開いて話すことのできる人との出会い、その後の人生を変える出会い)が強く関連していることが明らかになった。このことは、復興支援には、重要な他者となるような「だれか」との出会いを生み出しサポートするような働きかけが重要であることを示唆している。

(2) コンサマトリーな関係性の重要性

被災コミュニティに対する外部支援者(研究者を含む)の関わりとして、コンサマトリーな関わりが内発的復興の基礎となる。コンサマトリーな関わりとは、何かを「目指す」のではなく、一緒に過ごすことそのものを楽しむような直接・享受的な関わりである。復興支援は、しばしばインストゥルメンタルな(何かを「目指す」)関わりになりがちである。もちろんそれが全面的に問題であるわけではないが、インストゥルメンタルな関与の過剰は、被災コミュニティにかえって閉塞感や無力感をもたらしてしまう。それに対して、コンサマトリーな関わりは、被災コミュニティと外部支援者の信頼関係を構築し、被災住民が解決すべき課題から地域の豊かさへ視野を広げることを促す。コンサマトリーな関わりは、具体的な目標に向かうような関わりとは対極にあるため、それ自体の即時的な効果を示すことは難しい。しかし長い目で見たときに内発的復興を支える基礎となることを明記したい。

(3) 支援 - 受援(主体 - 客体)関係の脱構築

外部支援者と被災コミュニティの関係、すなわち「支援を与える側 - 支援を受ける側」という関係は、それが固定・強化されると、かえって内発的復興を疎外してしまう。これに対する単純だが効果的な解決策は、外部者 = 支援する主体 - 被災者 = 支援される客体という構図を逆転させることである。野田村では、震災後に設立されたNPOが、外部ボランティアと被災コミュニティの交流ツアーを実施し、「外部者が支援し、被災者が受け取る」という構図を、「村民が主体的に外部ボランティアをもてなす」という構図へと変換した。結果として、村民は主体的に地域資源を発掘し、外部者だけでなく村民同士の新たな関係性を構築した。コミュニティの活性化に結びついた。あるいは、住民間関係についても、日常的な支援 - 受援関係にひびを入れるような介入が、内発的復興に効果的であることを明らかにした。

(4) コミュニティ住民と外部者の対話の道具

コミュニティの内発的復興には、外部者との関わりが不可欠である。その際、外部者にとっては被災コミュニティの実情、特に、災害以前の日常を把握する必要がある。災害以前のコミュニティの日常風景を写した写真は、外部者と住民のみならず、多世代の住民同士の対話を賦活することが示された。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 13件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 渥美公秀	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 観光客（郵便的マルチチュード）としての災害ボランティア	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 9-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大門大朗・渥美公秀	4. 巻 2(2)
2. 論文標題 アメリカ社会科学の系譜と研究動向：災害研究センター（DRC）を中心とした歴史背景から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 15-40
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsumi, T., Seki, Y., & Yamaguchi, H.	4. 巻 Early-View
2. 論文標題 The Generative Power of Metaphor: Long-Term Action Research into the Recovery from Disaster of Survivors in a Small Village.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Disasters	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Daimon, H., & Atsumi, T.	4. 巻 Online first
2. 論文標題 Simulating disaster volunteerism in Japan: "Pay It Forward" as a strategy for extending the post-disaster altruistic community.	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Natural Hazards	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮前良平・渥美公秀	4. 巻 早期公開
2. 論文標題 被災写真による「語りえないこと」の恢復	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実験社会心理学研究	6. 最初と最後の頁 印刷中
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) doi:10.2130/jjesp.1711	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 李永俊	4. 巻 101
2. 論文標題 小規模被災地における人口動態と復興政策 岩手県九戸郡野田村の事例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 NETT	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伊藤哲司	4. 巻 29
2. 論文標題 世界に向けた研究対話の展望: 「適応」概念の越境を通して考える	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 189-198
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Atsumi, T., Seki, Y., & Yamaguchi, H.	4. 巻 in press
2. 論文標題 The Generative Power of Metaphor: Long-Term Action Research into the Recovery from Disaster of Survivors in a Small Village	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Disasters	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 渥美公秀	4. 巻 1
2. 論文標題 災害ボランティア論の再構築に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/67183	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 宮本匠	4. 巻 24
2. 論文標題 インクルーシブな地域防災の実現における課題	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 21世紀ひょうご	6. 最初と最後の頁 15-25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本匠	4. 巻 1
2. 論文標題 「災害と共生」を前にして : 内発的であるとは何か	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 災害と共生	6. 最初と最後の頁 21-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.18910/67186	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本匠	4. 巻 9
2. 論文標題 県外避難者の復興曲線から考えること	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 災害復興研究	6. 最初と最後の頁 73-80
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陳俐珊・永田素彦	4. 巻 36
2. 論文標題 巨大災害後のコミュニティの内発的な活性化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 集団力学	6. 最初と最後の頁 60-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11245/jgd.36.60	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 4件)

1. 発表者名 Motohiko Nagata
2. 発表標題 What factors make life after a huge disaster positive?
3. 学会等名 9th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 陳俐珊・永田素彦
2. 発表標題 巨大災害後のコミュニティの内発的な活性化～NPO法人のんのだ物語を事例に～
3. 学会等名 日本質的心理学会第15回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Young-Jun.LEE
2. 発表標題 Displaced by Disaster, Recovery and Human Networks
3. 学会等名 9th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinji Kawamura
2. 発表標題 A Case Study of Community-based Recovery Processes in Langtang Vil., Nepal - As comparison and for partnership with Noda vil. -
3. 学会等名 9th Conference of the International Society for Integrated Disaster Risk Management (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 災害ボランティアと他者性について 1995年2つのベクトル
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第65回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 復興曲線による災害復興研究(4)
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 当事者から考える被災体験の語りについて
3. 学会等名 第37回日本自然災害学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Motohiko Nagata
2. 発表標題 Knotworking on long-term disaster recovery: Five years action research after 2011 East Japan Earthquake and Tsunami.
3. 学会等名 the 12th biennial conference of the Asian Association of Social Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田素彦
2. 発表標題 長期的災害復興をめぐるネットワーク：東日本大震災後のアクションリサーチをもとに
3. 学会等名 日本質的心理学会第14回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田素彦
2. 発表標題 内発的復興を促す災害支援に向けて
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 永田素彦
2. 発表標題 ワークショップ「東日本大震災からの復興に向けた協働的实践とアクションリサーチ(5)内発的復興を支えるために」の企画および話題提供「東日本大震災をきっかけとした新たなつながりの創出と展開」
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミクス学会第64回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Motohiko Nagata
2. 発表標題 Improving regional care after catastrophic disaster through collaborative practice of local people and outside volunteers
3. 学会等名 Public Seminar, Disaster Research Center, University of Delaware
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Atsumi, T.
2. 発表標題 7 Years in Noda Village : Collaborative Practice, Action Research, & Education
3. 学会等名 Public Seminar, Disaster Research Center, University of Delaware
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 渥美公秀
2. 発表標題 災害ボランティアがもつ社会変革の可能性
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渥美公秀
2. 発表標題 野田村での長期的なアクションリサーチ～のだむラジヲとコミュニティラーニング
3. 学会等名 日本グループ・ダイナミックス学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 渥美公秀
2. 発表標題 観光客（郵便的マルチチュード）としての災害ボランティア 災害ボランティア論の更新の試みー
3. 学会等名 日本心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 アクションリサーチと<越境する知>
3. 学会等名 日本質的心理学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 災害ボランティアの現代性-1995年の2つのベクトル-
3. 学会等名 日本自然災害学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 宮本匠
2. 発表標題 熊本地震被災地の地域復興の現状について-熊本県西原村から-
3. 学会等名 日本災害復興学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伊藤哲司
2. 発表標題 東日本大震災からの復興に向けた協働的实践とアクションリサーチ(5) 内発的復興を支えるために (指定討論者)
3. 学会等名 日本グループダイナミックス学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 李永俊
2. 発表標題 小規模被害地域における人口動態と生活復興感 東日本大震災後6年目の住民アンケート調査から
3. 学会等名 日本グループダイナミックス学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Young-Jun. LEE
2. 発表標題 Displaced by Disaster, Recovery and Human Networks
3. 学会等名 Public Seminar, Disaster Research Center, University of Delaware
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 河村信治
2. 発表標題 コミュニティ・ベースでの震災復興プロセスの研究 - 岩手県野田村とネパール・ランタン村の比較研究と復興交流に向けて - (一次調査報告)
3. 学会等名 2017年度日本都市計画学会東北支部研究発表会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Shinji Kawamura
2. 発表標題 A Preliminary Report on Community-based Recovery Processes from the Disaster in Langtang Vil., Nepal - For comparison study and partnership with Noda vil. -
3. 学会等名 Public Seminar, Disaster Research Center, Univ. Delaware
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 渥美公秀・稲場圭信編	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 272
3. 書名 助ける	

1. 著者名 李永俊、永田素彦、山口恵子、日比野愛子	4. 発行年 2018年
2. 出版社 弘前大学人文社会科学部地域未来創生センター	5. 総ページ数 90
3. 書名 野田村出身のみなさまの暮らしとお仕事に関するアンケート調査報告書	

1. 著者名 伊藤哲司・呉宣児・沖潮満里子編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 210
3. 書名 アジアの質的心理学：日韓中台越クロストーク	

1. 著者名 草郷孝好	4. 発行年 2018年
2. 出版社 関西大学出版会	5. 総ページ数 170
3. 書名 市民自治の育て方～協働型アクションリサーチの理論と実践～	

1. 著者名 室崎益輝・富永良喜（編）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 災害に立ち向かう人づくり-減災社会構築と被災地復興の礎-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	李 永俊 (Lee Young-Jun) (10361007)	弘前大学・人文社会科学部・教授 (11101)	
研究分担者	伊藤 哲司 (Ito Tetsuji) (70250975)	茨城大学・人文社会科学部・教授 (12101)	
研究分担者	渥美 公秀 (Atsumi Tomohide) (80260644)	大阪大学・人間科学研究科・教授 (14401)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	河村 信治 (Kawamura Shinji) (80331958)	八戸工業高等専門学校・その他部局等・教授 (51101)	
研究 分 担 者	宮本 匠 (Miyamoto Takumi) (80646711)	兵庫県立大学・減災復興政策研究科・講師 (24506)	